

# 第33回

## 三重県透析研究会

### プログラム・演題抄録

会 長：川村 壽一

会 期：平成8年2月11日(日)

会 場：三重県医師会館

## プログラム

### 一般演題

1. 透析患者の食生活実態調査……………137  
市立四日市病院 伊藤 智子 他
2. 慢性透析患者の食事管理再調査 – P 値をみて –……………137  
上野総合市民病院 小山 順子 他
3. 服薬に関する患者の意識調査……………138  
武内病院 高橋 正代 他
4. 当透析センターにおける災害離脱訓練の実態調査……………138  
尾鷲総合病院透析センター 竹田 陽子 他
5. 当院における透析看護の新しい方向づけ  
– 病棟への積極的アプローチを試みて –……………139  
三重大学医学部付属病院 清水 恵利子 他
6. 透析導入におけるインフォームド・コンセントの一考察  
– 看護援助の検討 –……………139  
亀山医療センター 松田 あい子 他
7. 穿刺時の痛みに対する患者の意識を知る  
– ペンレスを使用して –……………140  
松阪中央総合病院 福岡 香里 他
8. リドカインテープ剤の使用経験……………140  
上野総合市民病院 馬場 敬子 他
9. 上体挙上による血圧変動を調査して……………141  
山田赤十字病院 山口 温子 他
10. 内シャント閉塞の原因についての一考察 – 第 1 報 –……………141  
武内病院 佐脇 克美 他
11. 6 名の CAPD 患者導入を経験して…………… 142  
羽津病院 高山 真貴 他
12. 結腸破裂に対してエンドトキシン吸着を行った慢性透析患者の 1 症例……………142  
武内病院 武内 秀之 他
13. エンドトキシン吸着カラム(トレミキシン<sup>®</sup>)の使用経験…………… 143  
三重大学附属病院 小藪 助成 他
14. 酢酸カルシウムの使用経験……………143  
羽津病院 岩田 英城 他

15. エリスロポエチン不要の血液透析患者について.....144  
川村第一病院透析センター 秋久 学 他

16. CAPDにおけるリンパ吸収量の推定法の体験..... 144  
羽津病院 牧田慶久 他

17. 長期透析患者にみられた不明熱の1症例.....145  
武内病院 武内秀之 他

18. 透析患者にみられた褐色細胞腫の1症例.....145  
亀山医療センター 東 良久 他

19. 有意狭窄を有さない透析患者の狭心症の検討.....146  
三重大学第一内科 大西孝宏 他

**特別講演**

**今後の透析医療を考える**

講師 医療法人衆済会 増子記念病院 院長 山崎親雄 先生

## 一般演題

### 1. 透析患者の食生活実態調査

市立四日市病院 栄養相談室

○伊藤智子、水野 豊、前田けい子、宮田佳子  
藤江久代、諸岡靖子

【目的】平成2年より北勢・中勢地区を中心に透析施設をもつ病院のコメディカルスタッフが「腎臓病の食事を考える会」という勉強会を年に3回行っている。会の目的は、患者さんがおいしい治療食を知り、より充実した生活が送れるように援助することである。

今回、食事療法の現状と問題点を明確にし会の指針とするため、調査を実施し検討した。

【対象および方法】会に参加している11施設の透析患者794名を対象に透析食の理解と実践等について、アンケート調査を実施した。

【結果】透析の長期化に伴い、水分管理・調味料等の計量において理論的には理解されていても実践が伴わなくなる傾向にあった。また、指示栄養量の把握は、水分や塩分に比べるとたんぱく質の認識が不十分であることが推察された。

【考察】患者さんをいかに満足させ、納得させるかということが今後の課題である。そこで、医療スタッフが連携した指導体制を作り、患者さん個々に応じた援助を継続して行うことが重要である。

【まとめ】今回の調査結果をもとに、「腎臓病の食事を考える会」をさらに発展させてゆきたい。

### 2. 慢性透析患者の食事管理再調査

— P値をみて—

上野総合市民病院 透析室

○小山順子、西口やよい、合田弘子  
小南利恵子、松山エミ、橋本 章、村山 卓

【目的】栄養指導、調理実習が血清P値に与える影響を検討すること。【対象】慢性透析患者75名、平均年齢59.6歳、平均透析期間72.9ヶ月。

【方法】患者の背景因子と栄養指導、調理実習への参加率を検討すると共に、その前後で血清P値を測定し、水分管理状態、透析年数、血清K値との関係を比較した。【結果】55歳以下の水分管理良好群は栄養指導、調理実習への参加率が高かった。血清P値の改善度と食事指導、調理実習の間には一定の傾向はなく、透析年数が10年以上の群では血清P値は73%に改善を認めた。水分管理良好群、もしくは血清K値改善群は血清P値の改善を認めるものが多かった。

### 3. 服薬に関する患者の意識調査

武内病院 透析室

○高橋正代、改正直子、鞠子ひとみ  
小西千枝子、生田順子、橋本さおり  
中村泰子 庄司みす

【目的】内服薬の自己管理状況及び服薬に関する意識の実態を明らかにし、今後の指導に役立てる。【対象と方法】当院で透析を受けている外来患者に用紙を配布し140名の結果を調査した。【結果】74.1%の人が正確に服薬しているが、内服できない理由として飲み忘れや、生活リズムと内服時間の問題がある。高齢者には家人にも協力を得る必要がある。薬について再度説明を希望している人は84%と高い。【結語】今後の服薬指導においては、看護婦だけでなく、患者を中心として家族及び、医療従事者らと共に連携し協力しあう事が必要と痛感した。

### 4. 当透析センターにおける災害離脱訓練の実態調査

尾鷲総合病院透析センター

○竹田陽子、奥村貴美子、水谷晴美  
岩崎美津子、小倉仁子 高木早苗、上田国彦

【目的】災害は予測なく突然起こる。透析中に発生すれば多くの透析患者を少人数のスタッフで対処しなければならない。当透析センターでは災害離脱セットを設置したのを機に、患者が回路からの切断を実際に行う必要性があると考え、定期的に訓練を行った。その結果を報告する。

【対象】平成6年6月

30才～75才の男女43名

【方法】3回の離脱訓練及び意識格差のアンケート調査

【結果】離脱訓練を実施した結果、完全に出来る人出来ない人は、男女、年齢、自己管理度透析歴には、なんら関係なく意識調査においても格差はみられなかった。

【まとめ】今後患者の訓練に対する意識を高める為に、個別性のある反復指導を行うと共にスタッフの役割分担、対応及び心構えの重要性を今後の課題とし、継続して行う必要性を認識した。

## 5. 当院における透析看護の新しい方向づけ —病棟への積極的アプローチを試みて—

三重大学医学部附属病院 人工腎室  
○清水恵利子、鈴木佳代、橋本ひで子  
小林恵美子

【目的】従来当施設では、病棟と透析室は別々に看護診断を立案していたが、患者を全人的にサポートするために、ケア内容の一貫性を行った。【対象及び方法】対象は喉頭腫瘍を伴った2例の透析患者で、透析室受け持ち看護婦が、病棟のプライマリーナースに患者情報、看護診断、目標、ケア計画の共有化を働きかけた。【結果】共有化することにより、継続性のある一貫したケアを患者に提供することができた。【考察】専門性の高い透析患者の看護は、チーム医療の充実が不可欠であり、患者自身が積極的に治療に取り組めるような環境の場として、透析室は重要な役割を担うことができると認識できた。

## 6. 透析導入におけるインフォームド・ コンセントの一考察 —看護援助の検討—

亀山医療センター 透析室  
○松田あい子、桜井エミ、中川公子

【目的】透析受容の良否が、透析導入後の心理状態や自己管理を左右し、生活の質へと影響を及ぼしている。今回、当院透析患者14名を対象に、インフォームド・コンセントがどのように行われているかを調査し、その場面における看護援助について検討したので報告する。【方法】当院で導入になった患者14名を対象にアンケート用紙を基に、聞き取り面接施行。【結果】1. 医師の説明内容と患者の知りたい内容には、ずれがあった。2. 透析が必要と言われたときの思いは、社会的問題より心理的問題が表出された。3. 透析が必要と言われたときの思いは、説明内容を十分理解するのは困難である。4. 治療の決定を患者が行わず、医師に任せたり、納得しないまま導入している。

## 7. 穿刺時の痛みに対する患者の意識を知る ーペンレスを使用してー

松阪中央総合病院 透析室

○福岡香里、松岡すみ代、高川節子

【目的】貼付用局所麻酔剤ペンレステープ(以下ペンレス)を使用し、穿刺時の除痛効果に対する患者の意識調査を行い検討した。

【対象及び方法】血液透析患者111名に、ペンレスの説明を行い、希望者には1ヶ月間、穿刺時2時間前にペンレスを貼付し、1ヶ月後にアンケートによる聞き取り調査を行った。

【結果】ペンレス使用患者は111名中64名で、1ヶ月間継続使用できたのは43名であった。11名は発赤または痒みによる皮膚症状で中止、10名は時間がないとの理由で中止した。除痛効果は1ヶ月間使用した95%に認められた。なおペンレス希望者は60才以上で、透析歴10年未満の患者に多かった。

【結語】ペンレスにより穿刺の苦痛は改善したが、今後患者の望むような除痛を積極的に取り入れたい。

## 8. リドカインテープ剤の使用経験

上野総合市民病院 透析室

○馬場敬子、山口はまえ、藤林順子

福沢百合子、松山エミ、橋本章、村山卓

【目的】透析患者の背景因子がリドカインテープ剤の疼痛軽減効果に与える影響。【対象】血液透析患者102名、平均年齢60.9歳、平均透析期間76.2ヶ月。【方法】透析患者の年齢、透析期間、Blood Access、水分管理、肥満度、基礎疾患(脳梗塞、糖尿病)がリドカインテープ剤貼付による疼痛軽減効果に与える影響を検討する。

【結果】テープ剤を貼れない症例は38例あり、そのうち糖尿病は18例、47.4%と高率であった。全体の疼痛軽減率は79%であったが、透析年数、Blood Access、肥満度と疼痛軽減効果には一定の傾向は見られなかった。脳梗塞、糖尿病合併の有無と疼痛軽減効果には差異がなかった。高齢者、もしくは水分管理不良群では疼痛不変例が多い傾向がみられた。

## 9. 上体挙上による血圧変動を調査して

山田赤十字病院

○山口温子、中村京子、嶋村信子、須崎京子  
小倉香里、浜口清子

【目的】透析中、臥床による同一体位が、苦痛を伴うのではないかと考え、30°に上体挙上することが、安全・安楽であるかを、検討した。

【対象及び方法】健常者95名を対象にした研究で、30°の上体挙上が安楽であるという報告がされているため、血圧変動の少ない透析患者10名を対象に、透析開始1時間後に、全員30°の上体挙上とし、その後2時間の透析を行った。30分毎に、血圧・脈拍を測定した。30°で苦痛を訴える患者には、15°の挙上とした。

【結果】上体挙上30°と15°は、血圧・脈拍とも臥床時と比べ、有意差はなかった。30°の上体挙上では、眠れない、腰が痛い、胃が痛い苦痛を訴えた患者が7名いた。

【結論】血圧変動の少ない患者に、30°までの上体挙上は安全であるが、安楽面から考えると、上体挙上は、15°までと思われた。

## 10. 内シャント閉塞の原因についての一考察

—第1報—

武内病院 透析室

○佐脇克美、蔵城清美、和田峰子、竹下佳代  
佐藤幸恵、庄司みす

【目的】内シャント閉塞群と開存群における年齢、透析年数、原疾患、ヘマトクリット値、体重増加率を比較検討する。

【対象と方法】平成3年1月1日～平成6年6月30日の間に、当院で継続透析を行った患者130例を閉塞群、開存群に分け、年齢、透析年数、糖尿病性腎症の割合を調べ、両群の同性、同年齢から、ヘマトクリット値、体重増加率について比較した。

【結論】両群に年齢差はなく、透析年数は、開存群の方が長かった。糖尿病性腎症は、閉塞群の方が多かった。ヘマトクリット値は、閉塞群の方が低く、シャント閉塞との関係がない事を示していた。体重増加率も、閉塞群の方が低く、閉塞との関係は得られなかった。



## 11. 6名のCAPD患者導入を経験して

羽津病院 透析室

○高山真貴、村鳥文子、林美恵子、福井是子

退院後、自宅管理を行わなければならないCAPD患者にとって、導入期には、専門的知識、技術を身につけることが重要であることがわかり、6例の症例の経過をふり返ることにより、導入期指導のあり方について考えた。

【目的】 1. 導入期の指導が統一化される。  
2. 指導及び看護が円滑に行える。

【方法・結果及び考察】 6名の患者を2期に分け、指導方法と患者の習得状況を分析し、問題を明確化した。その結果、指導する看護婦間が情報交換を行いながら、同じ視点で患者をみる、すなわち誰が見てもわかるものが必要であると考えた。そこで当院におけるCAPDスケジュール表の作成と、チェックリストの作成を行った。今後、これを活用し導入指導に取り組んでゆきたいと考えている。

## 12. 結腸破裂に対してエンドトキシン吸着を行った慢性透析患者の1症例

武内病院

○武内秀之、武内 操、西田正方、加藤広海  
近藤 功、武内純四郎

症例は77才女性。平成4年より腎不全のため血液透析導入。今回平成7年8月頃より貧血を認めたため注腸検査予定するも前処置中に突然腹痛出現し、諸検査の結果腸管破裂による腹膜炎と診断され入院となった。入院後緊急開腹手術となりBorr 3型の直腸癌を認めS状結腸が約6cmにわたり裂け、腹腔内は大量の糞塊を伴った腹水が認められた。手術途中より敗血症性ショックとなりカテコラミン剤、ノルアドレナリン投与するもショック状態が続くためエンドトキシン吸着を2回施行した。2回目の途中より急激な血圧の上昇を認め昇圧剤は減量、中止となりショックよりの離脱がすみやかにおこなえた。以上、エンドトキシン吸着は敗血症ショックに対して安全且つ有効な治療法と思われた。

### 13. エンドトキシン吸着カラム (トレミキシン<sup>®</sup>)の使用経験

三重大学附属病院 ICU

○小薮助成、高尾仁二、千種弘章、丸山一男

我々は汎発性腹膜炎術後3例、重症感染症1例に対して、エンドトキシン吸着カラム(以下PMXとする)を使用し有効であったので報告する。症例1は68歳男性の胸腹部大動脈瘤手術後の患者で、下血精査の大腸内視鏡後大腸穿孔による汎発性腹膜炎である。症例2は63歳女性でBudd-Chiari syndromeで経過観察中、虫垂炎による汎発性腹膜炎である。症例3は62歳男性で糖尿病を基礎とした肺炎等の重症感染症で、血圧低下等を認めた為PMXを施行した。症例4は56歳男性でBilroth II法手術後の輸入脚の穿孔による汎発性腹膜炎手術である。4症例中2例に持続的血液濾過術を併用した。4例中2例生存中であり、死亡症例も血行動態改善等効果を示し、PMXは急性期に著効を示した。

### 14. 酢酸カルシウムの使用経験

羽津病院 透析室

○岩田英城、疋田富美夫、小池秀昭、西幸久栄

【目的】当院でリン吸着剤としてアルミゲルを投与している維持透析患者8名を対象に従来の炭酸Caではなく酢酸Caを使用し臨床的意義について検討した。【方法】酢酸Ca投与前後6ヶ月間のCa、P、AL及びアルミゲル、活性ビタミンDの投与量の変化を比較した。【結果】1. 酢酸Ca使用後、アルミゲルの平均投与量は83%減少した。2. 血清AL濃度の平均は63 $\mu$ g/lから31 $\mu$ g/lへと減少した。3. 活性ビタミンD投与量は使用後4%増加したにとどまった。4. 使用量をもとに概算すると酢酸Ca一錠は炭酸Ca2gに相当すると思われた。【結論】酢酸Ca使用によりアルミゲルの投与量は減少し、血中AL濃度も減少したが、活性ビタミンDの投与量はわずかに増加したにすぎなかった。今後より効率的なリン吸着剤の出現が望まれる。

## 15. エリスロポエチン不要の血液透析患者について

川村第一病院透析センター

○秋久 学、辻 勇人、溝口幸博、山中隆之  
坂倉光智、川村直人、武内 亮、川村陽一

【目的】当院に於いてEPOを長期使用せず、貧血に至らない症例の背景及びEPO使用患者との比較、検討を行った。

【対象と方法】対象は、嚢胞腎を除くEPO未使用(6ヶ月以上)でHt30%以上を維持した24例である。対照群として、EPO未使用でHt30%未満群、EPO使用(週6000単位以上)群、EPO使用(6000単位未満)群とした。各群に於いて、年齢、透析年数、フェリチン、嚢胞腎の有無、Kt/V、PCR、血中EPO、レニン濃度等の項目について比較検討した。

【結果】EPO未使用、Ht30%以上群は年齢が若く、透析年数が長い患者であった。また多くは腫大した多嚢胞化腎萎縮を認めた。血中EPO濃度は明らかな差はなかったが、EPO未使用、Ht30%以上群はEPO未使用Ht30%未満群より高い傾向があり、一部の症例では高値を呈した。

## 16. CAPDにおけるリンパ吸収量の推定法の体験

羽津病院 透析室

○牧田慶久、水谷安秀

CAPDの長期継続にあたっては腹膜の除水能の減少が大きな問題になる。腹膜平衡試験(PET)とリンパ吸収試験(LAR)を同時に行い、腹膜機能を正確に評価できないかを検討した。【方法】糖尿病性腎症のためCAPD施行中の54才女性を対象に、Mactierの方法に従って25%アルブミン100mlを用いリンパ吸収率を算出した。また同時にPETも実施した。

【結果】1. アルブミンを用いたLARは再現性が乏しかった。2. PETは再現性が高かった。3. 280mg/dl以下では血糖はPETに影響を与えなかった。【結論】再現性が良好なリンパ吸収試験が確立され、PETと併用することにより腹膜機能を正確に把握可能となることが望まれる。

## 17. 長期透析患者にみられた不明熱の1症例

武内病院

○武内秀之、武内 操、加藤廣海、近藤 功  
武内純四郎

症例は53歳、男性。昭和50年より慢性腎炎による腎不全にて血液透析中。平成7年10月27日頃より感冒様症状出現し治療受けるも、夕方になると出現する38℃の発熱が続いた。11月中旬より圧痛を伴う左頸部リンパ節腫大を認めため抗生剤を投与したが解熱せず徐々に食欲低下、全身倦怠感が増強したため12月1日入院となった。当初結核性の疾患を考えたが、頸部のCT検査、超音波検査にて甲状腺左葉の腫大が認められた。血液検査にてT3 0.6ng/ml T4 6.3 $\mu$ g/dl TSH 0.05以下/ $\mu$ U/mlであった。以上より亜急性甲状腺炎と診断しプレドニゾン30mgを投与開始した。投与開始2日目より解熱し、発熱、臨床症状も速やかに軽快した。

## 18. 透析患者にみられた褐色細胞腫の1症例

亀山医療センター 内科

○東 良久、杉岡正樹、武内秀之  
三重大学第一内科  
大西孝宏

症例は72才女性で昭和48年にグッドパスチャー症候群と診断され、翌49年より腎不全のため人工透析を受けている。平成6年4月頃より発作的に頭痛、動悸を訴え、透析中にも同様の症状が出現した。その時の血圧が220-240mmHgと異常高値を示しており、同時に測定した血中カテコラミンの値が約10,000pg/mlと正常の100倍に達しており褐色細胞腫が疑われた。CTスキャンにて副腎腫瘍が、シンチにて左副腎に一致して集積が認められたため、褐色細胞腫の診断の基で摘出手術が考慮された。しかしグッドパスチャー症候群の再燃によると思われる肺出血、さらに胆嚢炎を併発し手術は延期された。この間透析中の発作性高血圧はほぼ毎回のよう出現し、除水による低血圧が引き金となって誘発されると考えられたため、エホチール2.0 $\gamma$ 持続投与にて症状のかなりの安定をみた。その後手術により、径2.0cmの腫瘍が摘出され、頭痛、頻脈、発作性高血圧は完全に消失した。

## 19. 有意狭窄を有さない透析患者の 狭心症の検討

三重大学第一内科

○大西孝宏、大道近也、柴田宗宏、清水啓之  
岡本紳也、山門 徹、高瀬高次郎、井阪直樹  
中野 赳

透析患者に見られた有意狭窄のない狭心症 2 例について検討した。患者は72才男性と62才の女性で、狭心症発作を有し、運動負荷陽性、心エコーにて著明な左室肥大は認められず、壁運動低下も認められていない。2例とも冠動脈造影で50%程度の病変を認めるも75%以上の有意狭窄は見られなかった。来院時いずれもHt25%以下の貧血を認め、Ht30%程度に改善した後に狭心症症状は改善した。その後運動負荷がなされていないため、断定は出来ないが、貧血が狭心症症状を増悪させた可能性が示唆された。